

角丸康子著「会津藩、幕末維新」トランヴェール 2012年10月号、JR 東日本、2012年10月1日発行を読む

規律ある学校生活が毅然たる士風を育む

「ならぬことはならぬもの」教育が生んだ会津の精神

1. 戊辰戦争の際、会津若松城下では男性ばかりか女性や子どもまでもちゅうちよせず武器を取って戦ったことは、よく知られる。このような会津の精神はいかにして生まれたのか。かねてより藩が教育に力を入れていたことに着目したい。
2. 時代を少しさかのぼってみよう。五代藩主・松平容頌^{かたのぶ}の晩年である享和3(1803)年、会津藩校日新館が完成する。名家老の誉れ高い田中玄宰^{はるなか}の提言により、人品正しく武芸に秀でた「国のためになるような」人材を養成するという方針の下に設立された、上級藩士の子弟のための学校である。
3. ここでは常時1000人ほどが学んだ。10歳で入学すると、まず小学校にあたる素読所^{そどくしよ}に通う。飛び級もあり年齢に関係なく試験に合格すれば進級できた。中には兄を追い越す利発な子もいたらしい。素読所卒業後、成績の優秀な者はその上の講釈所(大学)へ。1000人の中で大学進学を許されたのは数十人にすぎなかったというから、相当な狭き門とっていい。選択科目も多岐にわたり、和学はもとより蘭学、神道、雅楽、医学、数学、天文学などがあつた他、当時としては珍しい天文台も備えていた。
4. もう一つ、日新館では武道に力を入れていたことも見逃せない。特に刀、槍、弓、馬の4つは必修科目とされ、いずれも生徒は複数の流派から選ぶことができた。敷地内には「日本最古のプール」といわれる水練水馬池も設けられ、軍事泳法である向井流の泳法を学んだが、この訓練は間もなく生かされることになる。外国船が出没し、危機感を強めた幕府の命で会津が江戸湾警備に就いた折、初めて海に入ったにもかかわらず3人の藩士が4里(約16キロ)を完泳。周囲を驚かせたという。
5. 「知育、体育だけでなく、徳育、すなわち人としての骨格をつくることを重視したのも大きな特色です」
6. 広大な敷地に以前の姿を忠実に復元した「會津藩校日新館」の観光事業部長を務める仮名則嗣^{かりな}さんはそう解説してくれた。有能な人材を育成すべく実学を奨励したのは言うまでもないが、それだけでは不十分。自らに恥じるところがなく、人としての道に背かない。そんな「人づくり」に主眼を置いた学校での毎日を通して、生徒たちは厳しく指導された、とも。
7. また、幼児教育もおろそかにされなかった。日新館入学前の子どもたちは地域ごとに「什^{じゅう}」と呼ぶ集団をつくって学んだり遊んだりしたが、そこには「什の掟」と呼ばれる決まりがあつた。例えば、年長者を敬う、卑怯^{ひきょう}なことはしない、弱い者をいじめない、など。社会生活を営む際の基本的な心得だが、一朝一夕には身に付かない。「ならぬことはならぬものです」。日々、口に

出してそう唱える中で初めて自分のものとなる。

8. 江戸の昔、会津の子どもたちは、こうした振る舞いを物心つくかつかないかのところから自然に会得した。それが、戊辰戦争のときのこの地の人々の身の処し方につながったことは間違いないだろう。

P12 ~ 14

[コメント]

幕末、会津の藩校、日新館での教育がよくわかる角丸氏の文章。現代教育に最も必要なものは何かを考えると参考になる。来年の NHK 大河ドラマ、「八重の桜」で主人公山本八重(後の新島八重)の生涯を支えたのが、この日新館に代表される会津の教育のようだ。

— 2012年10月25日 林 明夫記 —